

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 鈴木希帆(スズキマホ)   |
| 学位の種類   | 博士(造形)  |
| 学位記番号   | 博第10号   |
| 学位授与日   | 平成24年3月31日  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第3条第1項第3号該当   |
| 論文題目    | 美術としての「縄文」に関する総合的研究   |
| 審査委員    | 主査 武蔵野美術大学教授 玉蟲 敏子<br>副査 武蔵野美術大学教授 柏木 博<br>副査 武蔵野美術大学教授 田中 正之<br>副査 武蔵野美術大学教授 神野 善治<br>副査 元文化庁文化財保護部 主任文化財調査官<br>東洋大学大学院 非常勤講師 土肥 孝<br>副査 MOA 美術館 副館長 内田 篤呉 |

## 内容の要旨

### 1 本論文の構成

本論文は、「美術としての〈縄文〉に関する総合的研究」と題し、一般の総合大学ならば文学部の考古学専攻において扱われる縄文土器について、武蔵野美術大学という美術やデザインを専門とする大学においてこそ専攻可能な、美術としての価値を問う斬新で意気込みに溢れた研究である。論文の構成は、目次に示すように、序論、第Ⅰ部古物としての縄文(江戸末期～大正)、第Ⅱ部美術作品としての縄文(昭和)、第Ⅲ部縄文土器の美の特質(現代)、結論と展望、資料で、三部・九章に序・結・資料で組み立てられる。第Ⅰ部から第Ⅱ部が扱うのは、江戸末期から昭和にかけての縄文の発見および近代における受容過程であり、第Ⅲ部の現代にいたって申請者、鈴木希帆の考える縄文造形論が展開されている。末尾に資料として、本論から外れた様々な分野の芸術家の縄文土器をめぐる見方や挿話を集めて付載する。

### 論文目次

序論 美術としての縄文を研究するために

第Ⅰ部 古物としての縄文(江戸末期～大正)

第一章 好古から人類学へ

(一) 江戸後期に始まる亀ヶ岡への関心

(二) 博覧会と人類学

第二章 文様への着目

- (一) 大野雲外による図案化 —— 縄文土器図案集の刊行
- (二) 大野図案の照合調査
- (三) 図案化の背景 —— 人類学の環境と画塾教育
- (四) 縄文土器図案の広がり

第三章 工芸と文学における関心

- (一) 陶芸家、図案家、工芸家による関心
- (二) 「集古会」における縄文土器
- (三) 太古ロマンの系譜

まとめ

第Ⅱ部 美術作品としての縄文（昭和）

第四章 ひらかれていく縄文

- (一) 考古学と展示上の効果
- (二) 工芸観の後退

第五章 土偶に始まる縄文の美術的受容

- (一) 土偶が「日本美術」になるまで
- (二) 前衛の動向と原始・縄文への美的関心
- (三) 造形論が語られない土偶
- (四) 土偶造形論展開の可能性

第六章 岡本太郎の縄文土器論

- (一) 岡本による縄文土器の美の発見
- (二) 超近代的な空間感覚の発見
- (三) 異様な神秘性に対する四次元的解決
- (四) 縄文の写真表現

まとめ

第Ⅲ部 縄文土器の美の特質（現代）

第七章 シンタックスによる構造分析の応用

- (一) 日本考古学の応用の限界
- (二) ギリシア美術考古学の応用の可能性
- (三) 縄文土器におけるカマレス・シンタックスの応用

第八章 縄文中期土器の平面的表現について

- (一) 絵巻の構造分析の応用
- (二) 連続性を意識する土器
- (三) 中心性を意識する土器

- (四) 連続性や中心性を持たず拡散する土器

#### 第九章 縄文中期土器の立体的表現について

- (一) 支持体=内容
- (二) 支持体<内容
- (三) 把手の美

まとめ

結論と展望 支持体を凌駕する造形意欲

資料 縄文観の再検討

- (一) アイヌ文様と縄文
- (二) 宮川香山における縄文的なるもの
- (三) 勅使河原蒼風と縄文
- (四) 建築における縄文的なるもの
- (五) 現代作品 ——三嶋りつ恵のガラスと縄文

## 2 本論文の概要

先ず、序論において美術として縄文を扱うことの気構えと論文の概略を示した後、第I部では第一章において、江戸末期から始まる縄文土器へ造形的な関心について、視覚的な挿図を含む考証随筆、菅江真澄の紀行文など多くの文献資料を万遍なく調べ、年代的に整理して論究する。第二章においては、とくに明治半ば、日本考古学の泰斗、坪井正五郎の率いる帝国大学理科大学人類学教室の周辺に現れた画工の大野雲外に着目し、大野が手掛けた三種類の図案集を紹介しつつ、掲載される縄文図案の元となった土器を、現在、東京大学総合研究博物館所蔵の標本資料のなかから探し出し、一覧表の作成を史上、初めて行っている。

第三章では大野以外にも明治から大正にかけて縄文に関心を寄せた工芸家の板谷波山ら、大野の図案の波及と好古家たちの団体である集古会の動き、蓑虫山人ら地方画家や江見水蔭ら文学者の縄文への情熱を「太古ロマン」と名付けて魅力的に描写する。そして、この時期に注目を集めた土器が層位学による編年表では、後期・晩期に集中しているという重要な指摘を行う。第I部の骨子となった論文は、美術史学の査読付学会誌『美術史』171冊(2011年)に掲載された「近代日本における縄文土器観——大野雲外による図案化を中心に——」であり、すでに美術史学において新知見に富む鈴木の研究が認められていることが明らかとなっている。

第II部では、昭和における縄文土器観を中心の話題とする。第四章では美術として扱われていく縄文の動きを東京帝室博物館などの展覧会や展示物の選択の面から探り、博物館

の普及活動が一般への関心の喚起に与ったことを指摘する。第五章では、美的な関心が次第に工芸的な関心の後退を招くいっぽうで、縄文中期土器への注目が芽生え、さらに先行研究の指摘を踏まえて1930年代頃から長谷川三郎ら前衛藝術家によって土偶への造形的関心が起こっていることを確認する。以上のように縄文土器への関心の前史を整理した上で、いよいよ、第六章で異なる文脈から数段飛躍させた形で岡本太郎が登場したことを指摘する。従来、マスコミなどのメディアでは縄文への美的な関心といえば、岡本太郎を持ち出せば事足りりとしてきたが、鈴木 of 考察によってその前史が深く広く掘り下げられ、岡本の登場の意義がいつそう明快になったといえる。

第六章では岡本の縄文論の本質と限界を探るために、岡本の民族学的関心、抽象主義彫刻にも迫る「超近代的な空間感覚」の発見、異様な神秘性への固執的な関心、さらに実物を前にしたときの実感に近い細部を際立せる写真表現などの四つの視点から考察する。そして、その藝術思想の根幹に「対極主義」があることを見出し、それが博物館などの展示によって強化され、ことさら縄文イコール原始性というイメージの普及と定着を促進したと指摘する。そして、岡本の迫力ある写真表現に考古学の標本写真とは違う魅力があることを確認した上で、その返す刀で岡本の登場以来、その言説の再生産を繰り返し、岡本を超える写真表現が未だ登場せず、また縄文の造形美が未だ語り尽くされたわけではないことを高らかに宣言し、第Ⅲ部へとつなげる。

第Ⅲ部では、Ⅰ部、Ⅱ部までの考察で確認された縄文の美の発見史上における岡本の意義と限界を踏まえ、満を持して鈴木自身の考える縄文の造形構造が論じられる。ここで主に取り上げられるのは、鈴木が縄文の美の要素がすべてつまっていると考える縄文中期の土器である。第七章では方法論の考察を行い、先づ従来の考古学が行ってきた文様帯による平面に還元した分析では、器形を凌駕する過剰装飾の土器を理解することは困難であるとして考古学的方法の応用を批判し、ギリシア美術考古学で連続文様に用いられたシンタックスによる分析を適用しようとする。しかしながらこの方法は限定された可視範囲の考察において有効であると限界を指摘し、第八章では連続性と中心性の問題を、日本の絵巻表現の文法的分析を行った先行研究を手懸りとして、具体例を取り上げつつ精密に分析する。しかもその二つの分析軸では捉えられない拡散する土器文様を持つ土器があり、その理由に器形と装飾の関係があることを見抜く。そして、いわゆる火焰土器がその範疇にあるという鋭利な指摘も行き、器形と文様の関係性へと問題を発展させる。

第九章は、器形を支持体、文様をそこに表わされる内容と仮定し、支持体と内容の関係性の分析から縄文中期土器の立体表現のあり様を徹底的に追求する。支持体と内容が等価的である場合から内容が支持体を凌駕する場合、すなわち文様が容器本来の形態から飛び出していく構造のものが勝坂式土器において出現していることを説得力豊かに論述する。さらにその追求の矛先は縄文の美の意外な本質とも言うべき細部への拘り、鈴木 of 言葉でいえば部分の美に向けられ、縄文の美がいわゆる縄文にあるのではなく、器面を這う立体

的な隆起線、すなわち生命力に満ちた紐状の表現にあることを確信して最終章を閉じる。

最後の結論と展望では、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部までの内容を要約し、残された課題への解答として考古学による型式分類を様式史として読み解こうとする視点がいくつか披露される。さらに縄文の美の連続性がその後に展開する日本美術のなかにも見出されるとする予見も盛り込んで、この長大な考察を終了している。付載の資料は以上の骨太の論旨からこぼれたアイヌ模様との関係、宮川香山、勅使河原蒼風、白井晟一、三嶋りつ恵ら近現代における建築や華道家、アーティストたちの抱いた縄文イメージやそれから触発された造形表現などを点描するが、新知見を多く含み、これまた今後の公表が期待される興味深い内容となっている。

## 審査結果の要旨

### 1 本論文の成果と問題点

以上のように、この博士論文は400字詰め原稿用紙にして400枚以上におよび、江戸末期から現代までの250年もの時間を通貫する縄文土器に関するあらゆる思想と立場の言説を整理し、その上で縄文土器の美を徹底的に造形的に分析した画期的な論考である。多数ある成果を箇条書きにすれば、以下のようなになるだろう。

- ・考古学占有の縄文から、美術をキーワードに考古学、日本美術史、近現代デザイン史、近現代美術史、民俗学、工芸史などの多様なディシプリンが集う新しい開かれた研究領域を創始したこと。
- ・未だ明らかにされていなかった江戸末期から現代にいたる縄文受容史について、実証的な資料調査および言説整理によって道筋をつけたこと。
- ・埋もれていた明治中期の画工、大野雲外が縄文研究に果たした意義を明らかにし、縄文土器の図案化の過程を実物照合によって実証的に確認したこと。
- ・縄文中期土器の造形構造について、現代的な方法論を駆使して徹底的に分析し、「支持体を凌駕する造形意欲」という新たな造形概念を美術史における縄文研究に付加したこと。

このように本論文は前人未到の領域を開いた優れた業績であるが、今後の問題としては、考古学の層位学に基づいた型式分類を様式の変遷史として読解すること、美術として研究していくために名品と一般的な土器の仕分けの方法や基準の探究、造形的に優れた関東の縄文中期土器と東北の縄文晩期の亀ヶ岡の土器の落差についての解釈、亀ヶ岡の土器が突然消えた謎の解明など、の諸点が残されている。これらの重要問題はすぐさま解答が得られるという質のものではなく、専門研究に従事し、視野を広げ、さらなる研鑽を積むことによって漸次的に解決されていくことと期待される。

## 2 最終試験と審査結果

本論は、「総合的研究」と題目にあるとおり多岐にわたる内容を有し、審査には複数のディシプリンに専門家を必要とした。審査員の体制は、予備審査までの考古学、日本美術史、近現代デザイン史、近現代美術史、民俗学に加え、本審査では工芸史の研究者の参加も仰いで万全を期することにした。提出された論文および平成24年2月24日の公聴会における質疑応答を踏まえた後の最終試験においては、申請者の鈴木希帆をまじえて質疑応答を行った。鈴木退席後の審査会においては、各分野の副査から以下の評価が寄せられた。

考古学では、土肥孝副査により、予備論文審査の際に指摘した考古学による縄文土器の編年の確立を明確に示すこと、モースによる日本人画工の評価、画家横山大観の縄文観に触れること、蓑虫山人と江見水蔭の登場の時間的整理などの問題点がすべて解決されていると確認された。本論の要である考古学ではなく美術として縄文土器研究が成立するかという問題提起に対しても、以下の観点から高評価を与えられた。すなわち、美術として縄文を捉える初めてのユニークな試みであり、美術的な様式研究の可能性が意欲的に示されている。大野雲外の業績の工芸や図案といった美術の観点から再評価を試み、さらに現状の時系列による考古学の編年研究が見逃していることの解明に向けて、鈴木のような美術による見方も有効に作用し、鈴木の研究は意義深いものである。そして、今後深める課題としては、美術として研究していくために名品と一般的な土器の仕分けの方法や基準、造形的に優れた関東の縄文中期土器と東北の縄文晩期の亀ヶ岡の土器の落差についての考察、亀ヶ岡の土器がなぜ突然消えたのかという問題の解明、などが指摘された。

近現代デザイン史では、柏木博副査により大野雲外研究や小室信蔵の『一般図按法』にふれ、19世紀末から20世紀初頭の図案(デザイン)研究の位置を浮上させるもので非常に興味深いものであった、という評価が寄せられた。

近現代美術史では、田中正之副査により近現代美術史の分野での造形構造分析を適切に応用し、縄文土器の造形構造への新たな見方を開いたといえ、また近現代美術における「縄文的なるもの」が果たした大きな役割も見事に分析されていた、という評価が寄せられた。

工芸史では、内田篤呉副査により本論文の成果は、岡本太郎の縄文の美の発見と、考古学ではなく美術史の立場から縄文土器の造形論を構築し、美術史としての研究領域の確立に向かう基礎研究となった。また縄文土器の美の本質について支持体を凌駕することであると結論づけたことは大きな成果であった、という評価が寄せられた。

民俗学では、神野善治副査により民俗の伝承における造形研究にも大いに刺激を与える内容になっている、という評価が寄せられた。

そして日本美術史では、すでに美術史学会において学術的評価を得ていることに加え、主査玉蟲としては、縄文を美術史学として扱うための方法の探索、縄文の美の特質を語る鈴木なりの言葉を模索していく思考過程の粘り強さ、それを支える柔軟かつ強靱な思考力を評価する。鈴木を目指す目標は高く、ようやく縄文土器を考古学による型式分類の編年から様式変遷史として捉えていくための第一歩が踏み出された状態であり、その前方に広

がる未到の道筋を鈴木が初めて開拓し得たことを、高く評価したいと考える。

以上の各分野からの評価をもとに、審査会において厳正に討議した結果、鈴木希帆「美術としての「縄文」に関する総合的研究」は、研究意図、新知見に見られる独創性、論述内容および形式の的確さなどにおいてすべての要件を満たし、かつ高度な学術的レベルに達しており、武蔵野美術大学平成23年度博士学位（造形）を授与するにふさわしい学位申請論文として承認された。よって最終試験は審査委員全員一致で合格とした。